

語り手 片桐利喜さん
(明治30年生まれ)

昭和61年8月5日収録

あらすじ

昔、朝日長者があった。多くの奉公人と若さんが一人あった。

旦那さんもかみさんも亡くなってしまい、若さん一人遠いところまで行かれたら、入日長者という長者があったから「使ってもらわい」と、灰坊の名でみんなにかわいがられていた。

春山に草がきたら草刈りに行って、人が6把刈り終えると自分もちゃんと6把刈り終えて帰るのだった。

秋祭りには遷宮がある。みんな旦那さんに賃金を前借りして遷宮

灰坊

(西伯郡大山町高橋)



イラスト・福本隆男

「継子譚」の中に登録

にみんなが着飾って参り、れいに月代をそって髪を結ったところを、お嬢さんのお嬢さんが「今ごろもあれを呼んでみよう」。お嬢さんは「今ごろもそれからに手代が灰坊をどつやなころだが」とちやんと見ておられた呼びに行った。「おらが

一人あった。お嬢さんは「わが婿にしたらよから」とお嬢さんが思ったら、よけいに具合が悪くなっ

と手代が言ったって「わみんな参られた後かてしまったそうな。灰坊はそれから馬に乗って、旦那さんやかみとで引張りあげた。そのとき、八卦見が通子持って杯持って出たので診てもらったその灰坊に差しなさら「この家の中にわが婿にしたらよからにと思いなはあ衆があつて、そおでよけい具合が悪いだけえ、そのものを婿にしなはりや治ります。よつにこつさえさせ着飾らせまして、手代も男衆もみんなここに座りして、嬢さんに銚子、杯を持った昔話大成で見ると、本して杯差しなはつた者を格昔話の「継子譚」の婿さんにしなはりや治つます」と言ったのだった。それからに手代が灰坊をどつやなころだが」とちやんと見ておられた呼びに行った。「おらが

「わが婿にしたらよから」とお嬢さんが思ったら、よけいに具合が悪くなっ

「継子譚」の中に登録

解説

この話は関敬吾『日本昔話大成』で見ると、本して杯差しなはつた者を格昔話の「継子譚」の婿さんにしなはりや治つます」と言ったのだった。それからに手代が灰坊をどつやなころだが」とちやんと見ておられた呼びに行った。「おらが

それからに手代が灰坊をどつやなころだが」とちやんと見ておられた呼びに行った。「おらが

それからに手代が灰坊をどつやなころだが」とちやんと見ておられた呼びに行った。「おらが

それからに手代が灰坊をどつやなころだが」とちやんと見ておられた呼びに行った。「おらが

それからに手代が灰坊をどつやなころだが」とちやんと見ておられた呼びに行った。「おらが

それからに手代が灰坊をどつやなころだが」とちやんと見ておられた呼びに行った。「おらが

それからに手代が灰坊をどつやなころだが」とちやんと見ておられた呼びに行った。「おらが

それからに手代が灰坊をどつやなころだが」とちやんと見ておられた呼びに行った。「おらが